

アウグスティヌスにおける悪の問題 : imago Deiからの頹落

高岸, 明日香
九州大学大学院 : 博士課程 : 哲学

<https://doi.org/10.15017/1430876>

出版情報 : 哲学論文集. 37, pp.69-85, 2001-09-25. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

アウグスティヌスにおける悪の問題

— i m a g o D e i からの類落

高 岸 明日香

アウグスティヌスは真に探求の人であり、その生涯全体は、「神と魂を知らんとすること」⁽¹⁾に捧げられたといえる。しかしこのことは、「神」と「魂」という別々の対象を別個に問い求めたという二つの志向性を示しているのではない。

「私を知りたもう者よ、御身を知らしめたまえ。私が御身に知られているように、御身を私に知らしめたまえ。我が魂の力よ、魂のうちに入れ。この魂を御身にふさわしきものとなし、御身がそれを汚れなく皺なく保ちうるようにせよ。」⁽²⁾

と、『告白』10巻冒頭で述べられているように、「神」Deusと「魂」animaは全く異なる対象ではなく、むしろ、魂（もしくは精神）は、神（—存在そのものの名）が何らか宿り顕現してくる場であると考えられ、それゆえ自己探求は即ち神探求へとつながるのであり、アウグスティヌスの生涯は、ただ一つの方向へとだけ向けられていたといえるであろう。つまり、アウグスティヌスは、神・真理を求めて、徹底的に自己を見つめ続けたのであった。

こうして生涯をかけて神を求め続けたアウグスティヌスにとつて、もつとも大きな問題として突きつけられたのが「悪」の問題であり、悪を為す作用因となりうる「意志」の問題であった。

一、人間の創造—creatioとimago Dei

聖書の中では、人間の創造 creatio について

「神は言われた。われわれのかたち・似像 imago と類似性 similitudo とによって人間を創造しよう。……神はその似像に即して人間を創り、男と女とに創った。」

と、記述されている。このことは勿論、単に字義的に神話として語られるような人間創造を意味していると解釈すべきではなく、人間という存在の在り方についてを象徴的な仕方⁽⁴⁾で示していると考えられよう。すなわち、人間は神の似像 imago Dei として、少なくともそれに向かつて存在している。

しかし、善なる神に似せて創られた人間は、それにも関わらず悪を為すことがある。このことについて、アウグスティヌスもまた

「我々は、存在するすべてのものは唯一の神によって存在し、そして神は罪の創造者ではないことを信じる。しかし、罪は神によって創られた魂から生じ、その魂は神によって存在するのだとすると、どうして罪は直ちに神にさかのほらないのか。」⁽⁵⁾

と、問いを提示している。そして様々な論証の後に、罪(悪)の起源は神に帰せられることはなく、「我々は意志の自由な決定によって悪を為すのだ」と、一つの結論に達している。⁽⁶⁾つまり、生まれながらにして自由な意志を持った存在である人間は、「悪を為す可能性」に常に晒されているといえるのである。それゆえ、人間が存在そのものの名である神に背を向け、神から離れていくことは、「罪」存在の欠如⁽⁷⁾となるのである。またこのことは同時に、人間が自由な意志の正しい働きによって「善」を欲し「善」を為す、すなわちより一層善き存在へと変わっていくであろうこと(回心 conversio、神への還帰、神

の似像への再形成」をも示しているといえるのではあるまいか。

この「神への背反」・「意志の転倒」は、「意志の分裂」「精神の病」として自己の内に見られるものである。アウグスティヌスはこれを「アダムの罪の罰」として語っているが、それは過去の「アダムの罪」と現にある「自己の意志の分裂」が通常因果関係をなしているというよりは、神話的表象という語り口をとりつつ、どちらも同じく「悪しく意志するという働き」⁵「自己の意志の転倒」を指し示しているのであるととらえるべきであろう。すなわち、アダム（とエヴァ）の原罪物語は、過去の個人的出来事として聖書の中に記されているとはいえず、そこにとどまるものとは考えられないのである。むしろ、アダムとエヴァの罪の成立を語るという仕方で人間の持つ自由な意志について、ひいては人間という存在について語っているといえるのではないだろうか。

アウグスティヌスによると、アダムは「永遠なるものに関与しうる精神・理性のなにものか」⁶を、エヴァは「時間的・感性的なものを管理すべく下方に向けられた理性の部分」をそれぞれ象徴しているという。この意味において、両者は男性・女性という独立した別個の人間としてではなく、一人の人間、一つの魂・精神に属するものとして捉えられているのである。それゆえ、聖書の中のアダムとエヴァの行為は、ただ単に一つの個人的な行為としてではなく、現に在る我々人間の行為に重なってくるといえるであろう。また、アウグスティヌスは「意志の分裂」（特に神を意志しながらもそこから離れていく神への背反）を「アダムの罪の罰」と位置づけているが、もし彼が特定の個人であつて、現に在る我々と何の関係もない過去の人であつたならば、彼の犯した罪が我々の罪として今もなお我々に帰せられるのはおかしいことである。しかし、我々人間がアダム・エヴァの複合体であるとするならば、罪を犯したアダムの本性、むしろアダム・エヴァの本性は同時に我々の本性であり、彼等は個人として罪を犯したのではなく、人間本性 *humana natura* として行為したというべきであり、彼等の罪が我々に帰せられるのもつともなこととなりうるであろう。

『創世記』のアダムとエヴァの原罪物語⁷において、主な契機を為しているのは、

神から食べることを禁じられていた「善悪を知る木の実」について、まず、

I) 蛇がエヴァをそそのかし、II) エヴァがそれを食べ、III) エヴァがそれをアダムに与え、IV) それをアダムが食べた、ということであった。

このことは、つまり、有限で感覚的なものによって誘惑され、その誘惑に自己が自ら同意を与えてそれを欲し、その欲することを欲するままに行爲したということである。言い換えれば、時間的な善いものの快楽が下方に引き留め、そこに自らの意志で留まってしまう、神に背を向けてしまったのである。「神の似像 *imago Dei* に即して、またそれに向けて創られた人間」が、その存在の根拠たる神に背を向けるということは、単に「意志の転倒」を示すだけでなく、自らの存在を非存在へと晒すことに他ならないといえるであろう。すなわち、アダム・エヴァの行爲は、悪しく意志することを示し、その原因はまさしく自己そのものに在ることを示しているのである。「悪の原因は自己の内にあることを知ること」から、我々はその罰として人が「死の性 *mortalitas*」を持たされていることを知るのである。そしてそのことによつて「存在」の問題へと駆り立てられるのである。

聖書には、最初の罪即ち神の命令に反して禁じられていた実を食べた後のことについて、「二人の目は開かれて、裸であることを知った。そこで二人はイチジクの葉を取つて覆とした」、「神が楽園の中を歩く音を聞いたとき、二人は神の顔から逃れようとして楽園の茂みの中に身を隠した」と書かれている。ここで「目が開かれて」とあるのは、実際に目が見えるようになって自分たちが裸であることに気付いたのではなく、精神の目でもいうようなものが開かれて「彼等が失つた善と彼等がそこに陥つた悪とを識別するため」であつたといえよう。つまり、自らが悲惨な状態（存在の根拠である神を失い、死の性を持たされた状態）に陥つたことを知つたのである。そしてさらにそのことを恐れて神から身を隠そうとしたのである。この時、ここに、初めて罪が成立するのである。

この時神は、身を隠している人に向かって「アダムよ、汝はどこに居るのか」と問いかけている。この言葉は勿論神がア

ダムの居場所を尋ねて問うた言葉ではない。アダムに対して、「アダムのいるところに神はいない」ことを気づかせるための言葉である。この問いかけこそが、自己の悲惨な状態を知り、そのことによってそこから至福である神のもとへと立ち返るようにと促す神の側からの呼びかけなのである。しかしせつかくのこの呼びかけに対して二人は、「蛇がだましたのでそれを食べたのだ」「女がこれを木から取ってくれたので食べたのだ」といいわけをするだけである。つまり、自己の行為そのものは認めつつも、その原因が自己の内在に在ることは認めず、神に向かって赦しや憐れみを求める代わりに、その原因を他に帰そうとしたのである。それは、信じかつ服従すべき永遠不可変なる神ではなく、有限で可変的なものへの愛着であり、神の側からの照らしにさらに背を向ける行為に他ならない。つまり、自己の存在をさらに小さく惨めなものとする行為である。こうして、人間は神からの呼びかけ（回心の促し）に従うのではなく、自らの意志に従うことによって神から離れ悲惨な状態におかれたのである。

このようにアダム・エヴァの原罪物語は、単に過去の個人的物語としてではなく、我々人間行為の在り方、その結果としての罪、さらに人間存在の在り方―神の似像からの頹落とそれへの還帰の促し（神の似像の再形成）―をも語っているといえるであろう。そして、「汝はどこに在るのか」という呼びかけは我々の内において「神よ、あなたはどこにましますのか」という問いとなり、神へ立ち返るために、自己探求へと我々を駆り立てるのである。

二、意志の分裂

前節において、『創世記』の原罪物語を通して、人間が自らの意志によって神に背を向け神の似像 *imago Dei* たる存在から頹落し、死ぬべき性を持った存在となったことを示した。しかし、そのことはただ単に悲惨な状態におかれてしまったというのではなく、神からの呼びかけに耳を傾け、神に従うことによつて再びより善き存在へと変容しうることも示されていた

のである。

生涯をかけて神を求め続けたアウグスティヌスにとって、

「私もあなたに完全に仕える機会を渴望していたが、縛られていた。それも他人からうけた鉄鎖ではなく、自分自身の鉄の意志によって。」⁽¹⁰⁾

という言葉で示される様に、「意志」は、大きな問題として突きつけられていた。

それは、特に以下に示されるような、「神を求めよ」という意志において、現在自分が如何なる者であるかを見つめる時に顕著である。『告白』8巻の叙述によれば、回心の直前、アウグスティヌスは激しい心的葛藤の中で「心を打ち砕かれ、ひどく苦しい悔恨の涙にくれていた」という。それは単に宗教的な罪の意識というだけではなく、自己を深く省みるとき、自己が他ならぬ自分の意志・欲望によって悲惨な状況におかれていることに気付かせられたからである。⁽¹¹⁾この時までにはアウグスティヌスは、「あなた（神）に完全に仕える機会を渴望し」ながらも、自己のうちに久しく住み着いた悪いもの・習慣のゆえにそれを完全には欲し得ず、また為し得ず、先へも進めず、後戻りもできないといういわば宙ぶらりんの状態⁽¹²⁾になっているという自己（の弱さ・醜さ）を見つめ、自覚しており、その相反する意志の働きによって魂が引き裂かれるような思いをしていたのである。

自己の内において自己の精神の働きであるはずの意志が全く別の方向を向いているというのは、いったいどのような状況であるのだろうか。

「同一の魂のうちにありながら、いろいろと異なる重さの愛 amor が分裂するのはどうしてだろうか。」⁽¹³⁾

アウグスティヌスは、このような言葉で自己の内にある様々な思い・意志の分裂について語っている。真摯に神・真理を求めていたアウグスティヌスにとっては、神に従おうとする自己と、それを先延ばしにして従おうとしない自己との分

裂は、「自分自身が、自分にとって大きな謎となつてしまつた」とまで言わしめた大きな問題であつた。(この言葉は、友の死に直面したとき、「心はすっかり暗くなり、目に付くものは全て死であつた」という悲痛な体験から発せられたものであり、当時彼の信じていたマニ教の神によっては閉ざされていた謎・闇である。)

アウグスティヌスは、愛は一種の(心の)「重やpondus」であると語つてゐる。そしてその重さによつて目指す方向へと引き寄せられていく。即ち、その愛が「何を」欲するかによつて、自己そのものもまたそこへと向かうのである。自己の内にいろいろ異なる重さの愛があれば、愛はその対象の異なりによつて分裂し、魂もまた引き裂かれるような思いをするのである。

「驚いたことに、私はすでにあなたを、その幻影ではなく真実のあなたを愛しはじめていた。しかし、私の神をいつまでも味わつてゐることができず、その美しさによつてあなたのほうへ引き寄せられるやいなや、自分自身の重さによつて突き放され、うめき声をあげながら下界に転落していった。その重みとは肉の習慣のことである。」⁽¹⁵⁾

とアウグスティヌス自身が語るように、神を求めていながらも、我々は有限な肉体を身にまといつてゐるがゆえに、肉の欲求(物欲や名譽を欲することなど)に引きずられて自己の外へと出ていき、神から離れる結果となるのである。しかしだからといつて、決して完全には神から離れ去つてゐるわけではない。アウグスティヌスは、

「しかしあなたの思い出は自分のうちに留まつた。私がよりすぎるべき方は存在する、だが自分はその方によりすぎられるだけの者になつてゐない、朽ちるべき身体が魂の上に重くのしかかり、心は地上の住処に押さえられて様々のことを思いわずらつてゐるのだから、ということを決して疑わなかつた。」⁽¹⁶⁾

こう語りつつ、更なる自己探求を進めるのである。「何を」求めるべきか、求めるそのものを完全には知ることができないにしろ、自分が「何者かを」知ろうとすることによつて、着実にその歩みを進めていくのである。

神に仕えることを欲していたアウグスティヌスにおいて、それを妨げていたのも、彼自身の意志によつてであつた。そのことについてアウグスティヌスは次のように真摯に自己を見つめていた。

「私は、内なる人によつてはあなたの法を心から喜んでいたが、やはり駄目だつた。肢体のうちにあるもう一つの法が精神の法に逆らつて、肢体のうちにある罪の法のうちに私を虜にしてしまった。罪の法とは習慣のもたらす暴力であり、その力によつて心は、いやいやながらひきずられ抑えられるが、これは当然である。何故なら、心は自らの意志で習慣に陥るのであるから。」⁽¹⁷⁾

このような激しい心的葛藤は、「心という密室の中で、自分の魂に対して激しく引き起こされた大乱闘」即ち、意志の内なる意志自身の戦いとしてあらわにされてゆくのである。そして身体ならば、魂・意志が欲すれば、例えば手足の運動のようによくそれに従うのに、自らの意志が欲していることについては、欲するやいなや、その「欲するということ」は出来たはずなのに（即ち「意志する」ということだけ見れば、意志するときすでに、意志するという作用は実現しているのに）しなかつた、つまり、精神は意志するように命じているのにそれが生じなかつたという奇怪なことを生じさせるのである。⁽¹⁸⁾

「この場合、精神は意志するように命じているが、もし精神がそれを意志しないならば、命じるはずもない。それなのに精神が命じることが行われないのだ。」

と、再び「自己自身が自己にとつて大きな謎となる」かのような分裂を目の前にするが、この時アウグスティヌスは、「何故こんなことが起こるのか、あわれみの光を輝かせ、光の中で尋ねさせてください」と祈つており、そこに、かつて「謎・闇として閉ざされていたことが、自己を真に問いぬく愛智の営みを促す契機となりうることを見ているのであるといえるであろう。そして、その奇怪なことについて

「実際、精神は意志する度合いに応じて命じるが、意志しない度合いに応じて命じることは実現しない。というのは、意志を起こすように命じるのは意志だが、起こるよう命ぜられている意志は、命じている意志に他ならない。」

「この場合、意志は全心をあげて意志してはいないし non ex toto vult¹⁹、したがってまた、全心をあげて命令をしたのである」

「それゆえ、半ば意志しながら半ば意志しないということは、奇怪なことでも何でもなく、実は精神の病 aegritudo animi に他ならない。すなわち精神は、真理によって上方に引き起こされながらも、習慣に押さえつけられているために、完全に起き上がることができないのである。」¹⁹

と、意味づけている。そしてこのことから、「意志の分裂」は、意志そのものが分裂し、何か異なる本性を有する別個のもの（魂）としてあるのではなく、一つの意志における意志する作用の分裂（一方が有するものを他方は欠いているという状態）であると結論づけている。それゆえ彼は、

「私は自分自身と争って、自分自身から引き離されたのであるが、この分裂そのものは、意に反して起こったのだ。しかしこの分裂は、自分のうちに本性を異にする別の精神が存在することを示すのではなく、むしろ（アダムの子である）私の精神がこうむっていた poena を示すものだった。」²⁰

と述べたのであり、また「現在の自分の意志の分裂」を通して「アダムの罪」を見、自己の意志の悪しき働きによって罪の状態へと引き裂かれている自己自身の姿が重なりつつ見えてくること（自己探求の還帰的構造）をも暗に示しているのだといえるであろう。

三、意志の転倒

アウグスティヌスにとって「意志」が問題となるのは、先述の様に神を求めるときである。では、我々が通常「意志」の問題というとき、一体どのようなことを考えているであろうか。おそらく、進学・就職・結婚などこれからの人生を左右す

るような何か重大な選択をするときに、自分の為に自分の意思で決定しなければならぬような局面を考へるのではないだろうか。確かにそれも（一般的に言つて）問題であろうが、それだけではなく日常の些細な行爲であつたとしても、そこには例えば空腹を満たしたいというような単純な欲求、さらに言うならば（意識すらされていないであろう）生きたいという意志があるのであり、そのような意味において、われわれは常に何かを意志し、そのうえで行爲しているのである。つまり、我々人間は生まれながらにして、意志を持った存在なのである。勿論、今ここで問題にしようとしているのは、そうした意識されない様な意志の働きではない。自己においてはつきりと意識され何かを意志しているところの、自由に基づいて意志し欲しているところのまさにその意志について、即ち自由な意志の働きについてなのである。

我々がこの自由な意志を行使するとき、

「……すでに知られたもの *visum* がなければ、意志を行爲へと引き寄せることはできない。しかし、人は、あるものを受け入れたら退けたりする権限 *potestas* を自ら持つとしても、意志がそこへと動かされる対象を決定する力を持っているのではない。それゆゑ、こういうべきである。精神 *animus* は自分より優れたものにせよ劣るものにせよ、見られた対象によつて動かされるが、理性的存在者であれば、どちらにせよ自分の欲するものを受け取るのであつて、その受け取つたことの報いとして悲惨または幸福が結果するのである。⁽²¹⁾」

と語られているように、我々は少なくともその何かについて「欲求されるべきもの（＝善きもの）」として措定し、そこへと自己の意志を向けているのであるといえるであろう。欲求されたものの個別的な内容には関わらず、ともかくもある方向へと向けられているのである。（そして、それは何かしら「知られたもの *visum*」である、ということに注目しなければならぬ。）

では、その意志は、一体どこへと向かっているのだろうか。おそらく、古代哲学以来の基本命題として承認されてきた「全ての人は至福であることを欲する」という言葉が示すように、「至福の生 *beata vita*」へと向けられていると言つてよい。

のではないだろうか。もっとも、「至福の生」という言葉を聞いて思い浮かべる内容は人それぞれであることは言うまでもない。アウグスティヌスはそのことについて、全ての人は至福であることを欲するが、それを得るためのしかたが違うのは、喜びを得ようとするしかたが違うからであり、しかし、その喜ぶということにおいては皆一致していることを確認している。⁽²²⁾ それゆえ、「この『喜び』こそは、至福の生と呼ばれるものである。ipsun gaudium vitam beatam vocant.」と定義付けているのである。アウグスティヌスにとつての至福の生は、「あなたをめざし、あなたによって、あなたのゆえに喜ぶことである」から、全ての喜びが真の至福であるのではないが、

「別のものを至福の生だと思っている人々は別のよろこびを追求し、真実のよろこびを追求しない。それにもかかわらず、彼等の意志は、真実のよろこびの一種の似像ともいふべきものから、完全にそむきさったわけでもない。⁽²⁴⁾」

つまり、たとえ偽りのものを至福の生として求めていたとしても、それがその人の意志によつて求められたのであれば、求められたものは何らか善きものとして措定されているのであるから、善そのものではないにしろ、それから完全には背いてしまったわけではないのである。それゆえ、「至福の生を欲する」ということは、特定の人⁽²⁵⁾にのみ許されたことではなく、全ての人において求められることなのであるが、ただ、「唯一の至福の生にたましますあなたによつて喜ばうとしない人々は、確かに至福の生を欲していない」だけなのである。

こうして我々の意志は常に「至福の生」を求めつつも、しかし、意志の自由な決定を善くも悪しくも用いることができるがゆえに、「肉はいかに霊に背いて欲求し、霊は肉に背いて欲求する」と聖書に語られているような状態になり、魂が引き裂かれるような思いをするのである。

このように我々の意志はある方向（善いもの・至福の生）に向けられているのであるが、同時に、意志がそれに背を向けそこから離れていく危うさもまた常に我々自身の内にあるのである。つまり、「欲するものを受け取ったことの報いとして悲惨または幸福が結果する」と語られているように、欲するという意志の働きこそが行為（とその結果）の原因なのである。

それゆえ、悪しき意志（転倒した意志）の働きの原因であり、罪の原因はまさしく自己自身の内にあるのである。そして、また、

「自分が生きていることを知ると同様に、意志を有するということをも知っていると、このことが私をあなた（神）の光のほうへと引き上げた。かくして、何かを欲したり欲しなかったりする場合、欲したり欲しなかったりするのが他ならぬ自分であることはきわめて確実であり、そこに自分の罪の原因があることに徐々に気付いた。」⁽²⁷⁾

こう語ることによって、アウグスティヌスは、自己反省的に自己を見つめたときに自己が自己自身を捉えるという仕方であることを知るのではなく、（神の）光に何らか照らされるといふ仕方を知る（氣付かされる）ということ、完全なる回心の前にすでに予見していたのである。

この神的な光に触れるということは、「自分が生き、意志しているとの自己知」を生じさせるが、それはあくまでも神の側からの照らしであり、自己自身が光となるのでは決してない。このことに注意しなければ、（アウグスティヌスが一時期心を寄せ、後に厳しく批判することになったマニ教徒のように）「主において光であることを望まず、自分自身において光であろうとして、ますます深い闇になる」⁽²⁸⁾であろう。この思ひ上がりこそは、「全ての人を照らす真の光であるあなたから遠く離れること」即ち「意志の背反・転倒」に他ならないのである。それゆえ、この「照らし」によって初めて、「私たちが悪を為すことの原因が他ならぬ自己の意志にある」ことを見ることができるようになるのである。

我々が何かを求めるとき、それは何かしら知られたものである。それゆえ、神・真理を意志すると言うときもまた、我々は何か神・真理について知っていると言うことができるであろう。しかし、それはあくまでも神・真理についての何かであつて、神・真理そのものを知っているわけではない。何故なら、無限なものには有限なものを、不可変なものには可変的なものをその内に完全に含むことはできるが、その逆の関係の場合、後者が前者の一部をその有限性可変性の限りにおいてのみしか分有することができないからである。つまり、有限で可変的な自己の内には、無限で不可変な神・真理を完全に宿すこと

は決してできないのである。

では、どこで、どのようにして神・真理に触れることができるのであろうか。

「可変的なものについて、…正しい言明や判断ができるのは、自己のうちに何がそなわっているからか。このような判断を下す場合、何にもとづいてするのかと尋ねてみて、可変的な自己の精神の上に、不可変で真実で永遠の真理を見いだしたのだ。」⁽²⁹⁾

このことはつまり、神・真理は我々の前・我々を越えたところにあり、我々は、自己がそれを（直視することはできないので）垣間見ることによって見る（知る）ことのできた部分を、自己が知りうる限りにおいて知るのであるといえるであろう。それは言うなればむしろ、神・真理の側からの何らかの働きかけとでもいうようなものがなければ、われわれはそれを真に意志し得ないであろうことを意味しているのである。この働きかけが「照らし」である。

換言すれば、我々が何かを意志するのは「自己自身から生じた意志」あるいは「神・真理から生じた意志」のどちらかによつてであり、それぞれに応じたものを得るのである。そして、この二つの意志のしかたこそが、我々人間の存在のありかたを示しているといえるであろう。即ち、自己自身から生じた意志に従つて生きる者は、神・真理に背を向け自己の内に留まりむなしの者となり、神・真理から生じた意志に従つて生きる者は、神に似る者 *Imago Dei* へとなつていくであろうことが示されているのである。

四、回 心

神・真理を求めて徹底的に自己を見つめ続けたアウグスティヌスは、その探究の歩みを

「私は段階的に、諸々の物体から身体を通して感覚する魂に、そこから身体の感覚をとおして外部の情報を受ける魂の内

なる能力に——ここまでは動物でもできる——、さらにそれを越えて、身体感覚から得られるものを判断する推理能力へと上昇していった。∴反対する様々な幻想の群れから身を遠ざけ、ある光を注がれたことを悟り、∴その光によって「不変なもの」自体を知ったのだ。∴そしてついに、おののくまなざしで「存在するもの」を一瞥するにいたった。⁽²¹⁾

と端的に語り、神を真に求める(神によりすがる)ことによつて、神の側からその光が注がれ、そのことによつて初めて「神」を知りうることを示すのである。

神からの呼びかけに耳を傾けること、或いは、神の側からの光(照らし)に気付くこと、そしてそれによつて神に向かうこと(神を意志すること)、このことこそが回心 *conversio* である。この回心という出来事は個々人によつてそれぞれ異なつたとき・状態で引き起こされるであろうが、回心そのものは、神からの照らしとして、皆の上に注がれているといえるのではないだろうか。人祖アダムが神に背を向けたときからずっと、その光は注がれていたはずである。愛の対象が神のほうへ向いたときに初めて、その光に人は気付くことができるのである。

「意志の分裂」を自己の内に見つめ、それが「アダムの罪の罰」として自己の内にあることに気付き、そのことから自己に立ち返り、神探求の道を徹底した自己探求の道として歩み始めた後、アウグスティヌスは突如として回心に導かれる。そのことを、

「おお主よ、われは汝のしもべ。∴汝はわが枷を断ち切りたまえり。」⁽²²⁾

と語り、まさしく神の側からの働きかけであることを告白するのである。かつて、自己を地上に引き留めていたあの枷——自らの重さ、自らのうちに生じた自己の意志を、神が断ち切つたのだというのである。このことは、回心が自らの意志によつてではなく、まさに神の側からの意志であることを示している。それゆえさらに、

「しかも主よ、あわれみ深く恵みにあふれるあなたは、全能の右手をもつて、私の死の深さをみそなわし、心の奥底から腐敗の淵をくみつくしてくださつた。そのため私は、自分の欲していたことをもはや欲せず、あなたの欲したもうことを

欲するようになった。」⁽³³⁾

こう述べることによつて、もはや自分が自己から生じた意志ではなく、神から生じた意志に従つて生きていることを示すのである。このことはつまり、自己の意志の否定・神の側からの働きかけを示すことによつて、自己が受動的な何か器のようなものとして、神を宿しうる存在であることを示しているといえるであらう。

しかし、一見全くの自己否定に見えるこの意志は、同時に自己の内にあつて永遠不可変なる神を志向する最も能動的な働きも持っているのである。即ち、個々の有限的可変的なものを意志することはなくなるが、むしろそれを捨て去つて、自己の存在の根拠へと開かれ、還帰していく動的な自己・精神を意味しているのである。また、永遠不可変なる神への志向は、自らの存在の在り方、つまり自らが神の似像 *imago Dei* にふさわしき者であるかということへの反省として自己自身に突き返されているものである。それゆえ回心は、自己存在についての受動的契機と能動的な問いとして、自己の内に現れてくるものであるということが言い得るであらう。

アウグスティヌスは、すさまじいまでの厳しさで自己探求を行い、それによつて、神を信じ神に従つて生きることこそが *imago Dei* たる人間の生き方であることを示した。このことは信仰を持たない人にとつても、少なくとも自己の内面に目を向け、自己が如何なる存在であるか、どう生きるべきかを問う自己探求の道が必要であらうことを示唆してくれているのである。

この厳しい自己探求は、決して過去の人アウグスティヌスだけが引き受けている問題ではない。物質的豊かさの中にありながら、精神・魂は何か満たされないものを感じていることの多い、つまりは「有限で可変的なものを求めている」状態の中にいる―それゆえその存在は、非存在へと晒され、虚しきものとなつている―今を生きる我々にもまた、突きつけられているのである。だからこそ、「汝はどこに在るのか」という呼びかけに耳を澄まさねばならないのだ。

註

- (1) Soliloquia, I. ii. 7
- (2) Confessiones, x. iv. 6.
- (3) O'Connell, "ST. AUGUSTINE'S EARLY THEORY OF MAN" (Harvard University Press 1968), 6. FALL OF THE SOUL
- (4) De Libero Arbitrio, II. 1.
- (5) 『自由意志論』、『神の国』12巻等。悪は「善の欠如」であるから、その原因を遡って問うことはできない。また、『聖アウグステヌスの哲学』アルバン・イシドマン・シュトルツ著、藤本雄三訳著の第五部参照。
- (6) De Trinitate, X II. vi. 8. : X II. vi. 12
- (7) 『創世記』第3章。原罪物語に関する引用は全てこの章より。
- (8) 『田エシント記』3, 14 「我は在りて在るものなり Ego sum, qui sum.」
- (9) De civitate Dei, XIII. x. 27.
- (10) Confessiones, VIII. v. 10.
- (11) *ibid.*, VIII. x. ii. 28. 「自分の内にあつた全ての悲惨が引きずり出され、心の目の前に積み上げられた……自己の悲惨な状況は自己が自己の意志に従うという結果生じてくる。反対に至福は自己の意志を捨て去り、神の意志に従うときに生じる。」
- (12) Confessiones VIII. x. i. 25.
- (13) *ibid.*, IV. x. iv. 22.
- (14) *ibid.*, IV. iv. 9.
- (15) *ibid.*, VII. x. vii. 23.
- (16) *ibid.*
- (17) *ibid.*, VIII. v. 12.
- (18) *ibid.*, VIII. viii.

- (19) *ibid.*, VIII, ix.
- (20) *ibid.*, VIII, x, 22.
- (21) *De Libero Arbitrio*, III, x x v, 74.
- (22) 『告白』、世界の名著16、中央公論社、359～360頁参照
- (23) *Confessiones*, X, x x ii, 31.
- (24) *ibid.*, X, x x ii, 32.
- (25) 「特定の人」とは、神を信じ神に従って生活する人のことであるが、「至福の生」を欲するのは、これら敬虔な人達にのみ許されたいことではなく、全ての人はそれを欲し得るのである。ただし、神を信じない人達は、真の喜び（神において喜ぶこと）を知らないので、「至福の生」を欲しているとはいえないのである。
- (26) 『ガラテヤ人への手紙』5章17節
- (27) *Confessiones*, VII, iii, 5.
- (28) *ibid.*, VIII, x, 22.
- (29) *ibid.*, VII, x vii, 23.
- (30) *De civitate Dei*, XIV, iv.
- (31) *Confessiones*, VII, x vii, 23.
- (32) *ibid.*, IX, i, 1.
- (33) *ibid.*